

◎4月23日(日)開催 第2979回例会
兵庫県山岳連盟同調 読図も学べる/
自然観察山歩「赤子谷東尾根を辿る」
布引支部 R.M

2ヶ月前、思いもしなかった病のために入院。幸いにして処置が早く軽度で済んだおかげで、2週間後には普通の生活に戻ることが出来た近況です。お付き合い下さっている皆様には大変ご心配をおかけしましたこと、お許し下さいませ。さて 久しぶりの自然観察山歩で、しかも裏六甲東部となると場所もコースも初めてである。はてさて歩けるかな・・・?と不安はあったが、好きな行事なので参加させて頂くことにした。JR生瀬駅前午前9時30分集合。真っ青な空に綿菓子のような白い雲がのんびりと浮かんだ申し分のない登山日和である。コースを案内して下さるのは山岳連盟の役員でもある当会の吉野会長。本日参加された方は、講師を含め総勢37名とのこと。駅前では狭すぎるため登山道入口に近い公園に移動し、朝礼と軽い準備体操をする。



(気持ちの良い青空の下、のびのびと準備体操を！)



(講師の紹介やコース説明等を終え、さあ出発です！)

体操リーダーは女性のM・Sさん。若いだけあってストレッチする手足の伸びが私とは随分と違います・・・！ 赤子谷の谷筋や尾根筋へ入って行くには、住宅が多く建つ生瀬高台の一番南の奥から赤子谷へ延びている林道らしき道に行くのが解りやすいそうであるが、今日私達が歩くのは、水路(生瀬用水)に沿った路を進み、途中から水路を跨いで山道に入るコースであった。



(上/水路に沿った道と、下/東尾根への入口)



(東尾根へ入った所より琴鳴山・376Mを望む)

いただいた資料や朝礼時のコースリーダーの説明によると、赤子谷や琴鳴山の名の由来(伝承)は、若い男女の美しい恋物語が事の始まりで、身分の違いからその仲は許されず、安住の地を求め二人は有馬に来る。やっと落ち着いて満ち足りた日々が来たというのに、男は病に倒れ亡くなってしまふ。誕生した赤子もその後突然死に、嘆き悲しんだ女は琴を奏でた後、自分も命を絶つ・・・

という何とも哀れな物語である。それからは、谷から聞こえる赤子の泣き声や、琴の音が向いの山に反響して聞こえてくるところから谷を赤子谷、向いの山を琴鳴山と呼ぶようになったとのことであった・・・少し奥に入ると奇石が樹立する蓬莱峡があって、六甲のバリエーションルートの一つとして楽しめる座頭谷がある。この谷の名の由来も哀れで、「有馬に湯治に向う途中だった座頭が、この谷に迷い込んでしまい、生き倒れになってしまった」という悲劇からついた名だそうだ。何れにしても今日の様な好天時は気持ちも良いが、名の由来を聞くと、天気の良い薄暗い時はあまり気持ちの良いコースでは無さそうに感じた。

生瀬高台のからの林道を跨ぎ、いよいよ東尾根の核心部へ踏み入る。急登の尾根を忠実に詰めていくと、約30分余りで高圧線鉄塔 No23 に飛び出した。



(高圧線鉄塔 No23 のすぐ下・ロープ有り)



(明るい日差しの中で楽しい食事です！)

なにぶんにも狭く急登な尾根筋なので、腰を下ろして休憩する場所は無く、唯一37名が何とか食事が出るのはこの場所だけであるらしい。下見をして下さっているリーダーの指示で、楽しい昼食タイムとなった・・・。



(コバノミツバツツジが満開！)

昼食後は、お馴染みの環境省神戸保護官事務所・高橋アクティブレンジャーさんによるレクチャーに耳を傾けた。それにしても、今日は休日であるにも拘らず、私達の為に行動を共にして下さる高橋さんに心より感謝を申し上げる次第です。



(高橋アクティブレンジャーのレクチャー風景)

引続いて読図のお勉強を。講師は藤崎理事さんである。準備して来て下さった手書きの説明図を開



(藤崎理事さんによる読図の解説風景)

いて解りやすく解説下さり、皆さんも大変熱心に聞き入っておられたのが印象的でした。

さて、ここからは関電の鉄塔管理道なのだろうプラスチックの階段が上へ延びていた。会長の話にも有ったが、地形図に示されている高圧線は、読図の重要なポイントとなる・・・ということが良く理解できるコースである。間もなく左右を示した赤い矢印の立っている水平道へ出た。そこから



(六甲全山縦走路標識No.35)

は快適な道を 12 分程歩くと縦走路に飛び出し、右上上の三等三角点のある岩倉山(488.4M)に着いた。又々、マイナーなコースを充分楽しむことが出来た**自然観察山歩**に感謝致します！



(岩倉山山頂・祠をバックに全員集合！)

天 候 晴れ

参加者 37名(当会員29名)